

ごあいさつ

近畿公立小中学校事務職員研究会
会 長 原田 卓

今年度より2年間、近畿公立小中学校事務職員研究会（以下、近事研）会長の大役を拝命しました原田と申します。新役員一同、これまで近事研に関わってこられた諸先輩方の思いを受け継ぎつつ、これからの時代に即した研究会として、学びの場をみなさまにご提供できるように取り組んでまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。また、単位研究会の皆様には、日頃から近事研の活動にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

この約3年の間は新型コロナウイルス感染症への対応に苦慮し、研究会活動も大きな制約を受けながらの活動を強いられました。少しずつ制約がなくなる中、研究会活動も以前のような形に戻りつつありますが、元どおりにするのではなく、コロナ禍で得た知見も活用し、バージョンアップした持続可能な研究会でありたいと考えております。この8月18日には、参集とオンラインのハイブリッド方式で近事研研究大会（滋賀大会）を開催いたしました。全国各地より約260名の方にご参加いただきありがとうございました。多くの仲間と交流し、議論を深め、有意義な学びの場となったのではないのでしょうか。

さて、令和2年7月に文部科学省より事務職員の標準的な職務の例が通知されてから早3年が経過しました。また、平成29年3月に職務規定が「つかさどる」と改正されてから6年が経過しています。みなさまの業務はどのように変化したのでしょうか。これらの通知が契機となり、大きく変化したとを感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、何も変わっていないとを感じる方もいらっしゃるかもしれません。その差はどこから来るのでしょうか。学校事務職員自身の意識の差によるもののでしょうか。職務環境の差によるもののでしょうか。それとも…。今一度、学校事務職員に対する社会の期待に答えていくために、我々が果たすべき役割を考え、それをどのように実行していくのかを考える時間を持ってみたいのではないでしょうか。

令和7年開催予定の全国公立小中学校事務研究大会（滋賀大会）（以下、全事研滋賀大会）に向けて、「近畿はひとつ」のスローガンのもと、近事研としてもこの大会の盛会に向けて事業を展開していきたいと考えています。この2年間は、調査研究部としては独自の活動は致しませんが、単位研究会同士が交流できる場を設け、それぞれの単位研究会で進められている研究をブラッシュアップできるようにサポートして参ります。

私たち学校事務職員は、こどもの豊かな学びを実現していくために、ヒト・モノ・カネ・情報・時間などさまざまな資源をマネジメントするリソースマネージャーとして、校務運営に参画していくことが期待されています。どんなことでも構いません。よりよい学びの環境づくりのために一步を踏み出してみましょ。近事研は、そんな皆様の力量を高める場であり、色々なつながりづくりができる場でありたいと考えています。



新役員 紹介



役 職 名	名 前	所 属 研 究 会
会 長	原田 卓	大阪府公立学校事務研究会
副 会 長	中川 由紀夫	滋賀県公立小中学校事務研究協議会
副 会 長 (調査研究部担当)	細見 夏子	奈良県公立小中学校事務研究会
会 計	村岡 真湖	京都市立学校事務研究会
事 務 局 長	四方 眞由美	京都市立学校事務研究会
事 務 局 次 長 (研究担当)	大家 翔吾	滋賀県公立小中学校事務研究協議会
事 務 局 次 長 (広報担当)	宮崎 利靖	大阪府公立学校事務研究会
監 査	澤田 彩	奈良県公立小中学校事務研究会

次回の近事研研究大会は、令和7年度に開催される全事研滋賀大会と同心円開催と致します。それに伴い、調査研究部員および研究大会実行委員については、今期は募集を行いません。

なお、全事研滋賀大会の分科会の盛会に向けて、単位研究会ごとに進められている研究について情報交換をする場を提供し、他の単位研究会から意見やアドバイスを受け活用することで、研究会相互の連携を深めていきます。



代 議 員 会 報 告

令和5年度の第1回代議員会は書面表決にて実施し、10月26日(木)に表決の結果を公表しました。

表決の結果、令和4年度事業報告及び監査報告、会計決算及び監査報告、令和5年度事業計画案、会計予算案の全議案が承認されました。
代議員のみなさま、ご協力ありがとうございました。



【近事研サマーフォーラム】

令和6年7月26日(金) 午後
たかつガーデンにて開催予定です。

近事研研究大会（滋賀大会） 報告

令和5年8月18日、滋賀県大津市のピアザ淡海において第15回近事研研究大会（滋賀大会）を開催しました。本大会は、コロナ禍の影響もあり、9年ぶりの開催となりました。この9年の間で、ICT技術をはじめとして、我々を取り巻く環境は大きく変化してきた中、過去を継承しつつも、新しいことを積極的に取り入れた研究大会にしていきたいという思いのもと、大会テーマを「アップデート近事研！ 笑顔輝く令和の学校事務を考える」とし、サブテーマを「ベストミックス+ハイブリッド（効果×効率×現地×オンライン）～令和の学びの形を創造する～」としました。



テーマにもあるようにアップデートした研究大会に挑戦し、新たな取組として、参加者の申込と参加費の支払、参加者の管理、当日の受付まで、Peatix（アプリ）を利用した一元管理を行い、研究集録や当日の配布資料は、クラウド上に保存された資料を各自が取るようにし、デジタルで見たい人、紙で見たい人、それぞれに対応できるようにしました。また、現地参集とオンラインのハイブリッド形式で開催し、現地参加者、オンライン参加者にかかわらず、リアルタイムで意見交換ができるようにGoogleフォームとスプレッドシートを活用しました。

研究大会では、第10期調査研究部による研究報告と、全体会として、福島国際研究教育機構（F-REI）理事 木村 直人氏、学校法人湘南学園 学園長 住田 昌治氏、戸田市教育委員会 学校経営アドバイザー 小高 美恵子氏、長浜市立余呉小中学校後期課程 主任事務主査 松田 幸夫氏の4名をお招きしてパネルディスカッションを行いました。



調査研究部報告は、『コミュニティ・スクールで三方よし～令和の学校事務の新たな一歩～』というテーマで、「コミュニティ・スクールにおける学校事務職員の役割」について研究を行いました。会員を対象に実施したアンケートの回答分析から、今後、学校事務職員が学校運営協議会（コミュニティ・スクール）に関わっていくにあたって見えてきた、「学校事務職員の負担感」・「意義の見えにくさ」・「きっかけ・慣例がない」・「つながり」という4つの観点について研究を進め、報告しました。

「学校事務職員の負担感」の観点については、受動的な関わりだと負担感が増すため、能動的・主体的に関わることによって、自己有用感が高まり、結果として、負担感の軽減につながると分析しました。「意義の見えにくさ」の観点では、学校教育との関わりが見えてこないという意見が多く、これについては、地域との交流を通して、地域への愛着が湧くことは、子どもだけでなく、地域にもメリットと



なり、学校と地域との関係性の点においても好循環が生まれるのではないかと分析しました。「きっかけ・慣例がない」という観点では、学校運営協議会に参加していない理由の中で、「慣例がない」という回答が一番多く、そのことから、能動的にきっかけを作ることが必要だと考察しました。「つながり」の観点について、肯定的な回答の中に「つながり」というキーワードが多くみられ、つながることによる効果は様々な面で期待されており、学校事務職員は立場上、学校全体を俯瞰することができ、学年間や教科間、担任と管理職をつなぐといった橋渡しの役割をしている場面も多く、そのノウハウは、コミュニティ・スクールの関わり方への第一歩になるのではないかと分析しました。最後に、研究部長が「学校事務職員の活躍の場を広げていくために、今、その一歩を踏み出してみませんか」という言葉で、報告を締めくくりました。



パネルディスカッションは、大会実行委員の堀井氏のコーディネートのもと、『「令和の日本型教育」をどのように推進していくか』『今だからこそ問う あなたにとって「学ぶ」とは』という2つのテーマに沿って、各パネリストより、それぞれの立場から発言をしていただき、議論を深めていきました。また、パネルディスカッションの議論をリアル

タイムに可視化するグラフィックレコーディングも実施しました。

『「令和の日本型教育」をどのように推進していくか』の中では、コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへの転換や教育DX、「楽校共育」や学校運営協議会と学校事務職員との関わりについてなどが、『今だからこそ問う あなたにとって「学ぶ」とは』の中では、熟議・協働・マネジメントやPBL(Project Based Learning)、新たな学習の柱を考える必要性、人生百年時代の中で「生きることが学ぶこと、学ぶことが生きること」という発想の転換の重要性などがキーワードとして挙げられました。最後にコーディネーターが「学びを続けることで幸せになれる、幸せであるからこそ学び続けられる、そのような循環の中で私たちはアップデートし続けることができるのではないかと思います」という言葉で締めくくりました。



～大会実行委員長より～

第15回近事研研究大会(滋賀大会)に、近畿をはじめ全国各地から多数のご参加をいただき誠にありがとうございました。平成26年度神戸大会以来9年ぶり、また3年におよぶコロナ禍を経て、オンライン併用の大会運営など新たな試みも取り入れながらの開催となりましたが、参加者並びに関係機関の皆様方のご協力により無事終了できましたこと、深く感謝申し上げます。今大会では学校事務職員として子どもたちのウェルビーイングのために何ができるのか、何を大切にしていかなければならないかを考えるきっかけになることを期待して大会テーマを設定いたしました。大会で学んだことを自らの「アップデート」につなげていただき、各地域での実践の一助としていただけることを願っています。ありがとうございました。

倉辻 弘美

〈 文責：宮崎 利靖 〉